第十九回「三土新明会」

津軽こけしの世界



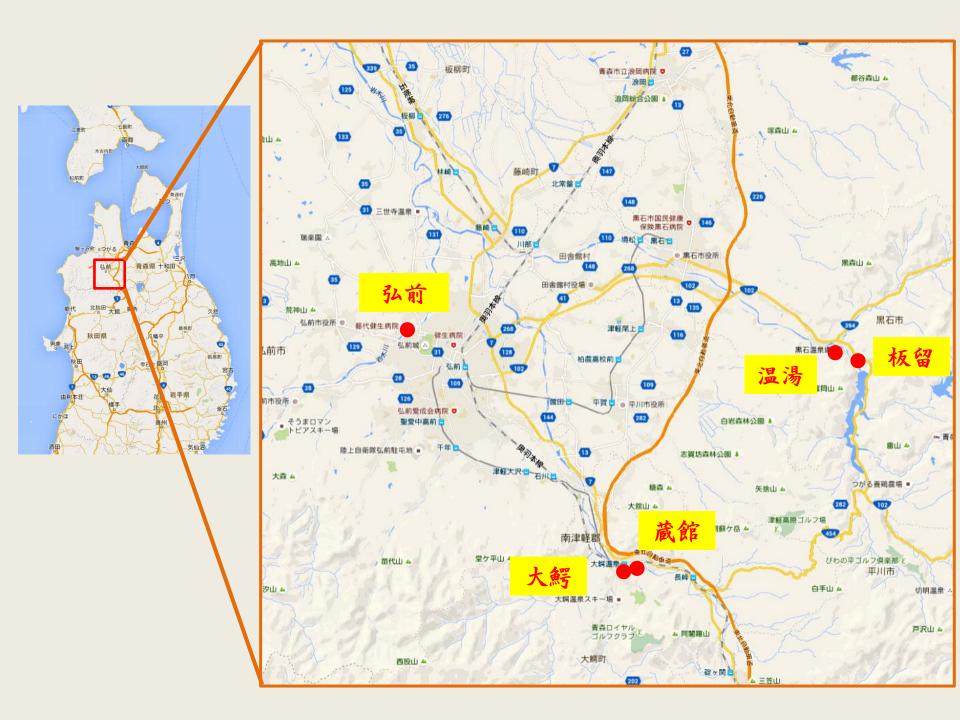
June18, 2016

橋本 正明

津軽こけしの世界

今日の論点

- 木村弦三の言う「木おぼこ」「長おぼこ」 は本当にあったか?
- あるいは津軽系こけし自体が木村弦三の プロデュースにより生まれたものか?



津軽の木地師

大鰐七軒

- 間宮忠太郎-明太郎
- 村井伊三郎 福太郎
- 澤田九郎兵衛
- 田中忠太郎-重吉
- 油川
- 横山
- 姓不詳

温湯九軒

- 斎藤幸太郎-幸兵衛⇒大鰐⇒弘前
- 盛與助 元吉 秀太郎
- 毛利與七-茂太郎
- 毛利丑蔵
- 盛末太郎
- 佐藤伊助-伊太郎 ⇒弘前
- 佐藤久太郎
- 佐々木金助-金次郎 板留⇒大鰐
- 嶋津彦蔵 -彦作 ⇒大鰐

弘前藩第四代藩主津軽信政(1646~1710)が産業振興に力を入れて支えた津軽塗の木地職人達が大鰐に定着した。村井伊三郎は津軽公の御前で木地挽きを披露に及んだこともあったという。

元正8年(1622)山形の最上家が改易となり津軽に移住。藩内の住民も移住して 住み着いたのが山形村。木地屋もいた。

木村弦三の記憶(1)

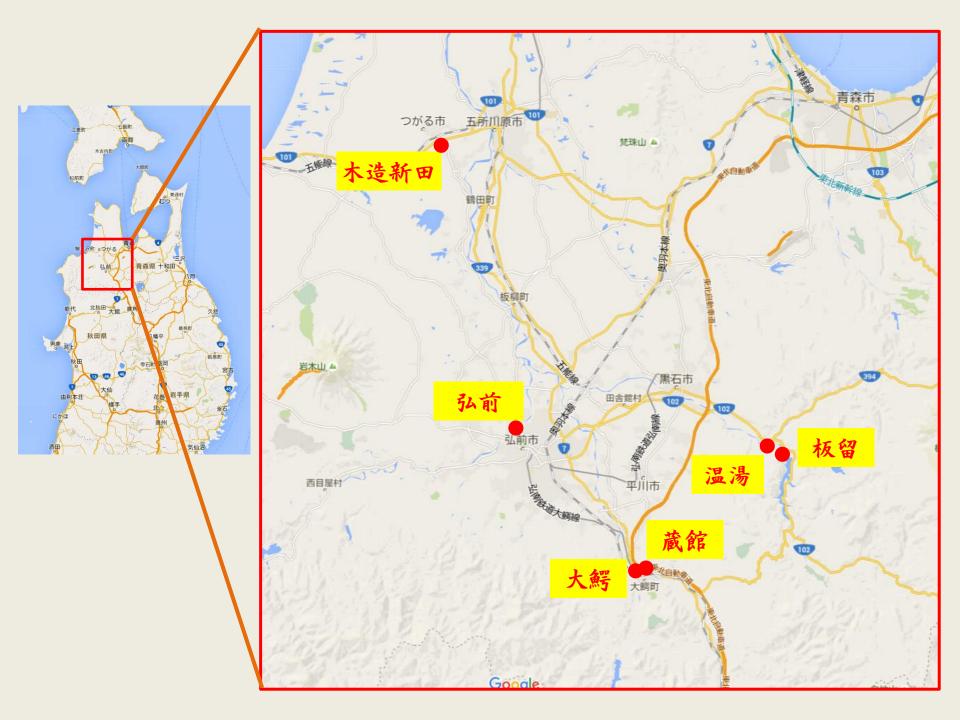
わたしたちの幼時、大鰐あたりでこれを挽いてゐた思出を、幽かに蘇へして呉れるが、それは木おぼこと呼んだと思ふ。然し温湯の工人たちには、長おぼこであったことは極めて最近知った名である。そして何れの木地挽屋を把へても、この名で尋ねると一様に古い頃の子供の遊びと一しよに、これを思出してくれるのだった。 〈木形子異報·2〉 昭和9年2月

木造新田の浴客・・・稀に隣り合したりする時、やさしい女の子などの新田訛によく魅せられたりもした・・・・遠来のこの客たちには、こんな木通(あけび)のがらがらも縄で束ねる程澤山、荷馬車の底に下けられたし、また求めたいろいろな木地挽玩具中にも、木おぼこの存在が必然的にあったりした思出がある。就中もう帰郷する荷馬車のなかに、湯治中翫んてるた木おぼこを、後性大事にかかえた色の白い女の子がちんと荷物の中に坐ってるたことのあったのが目に浮かんで来る。 〈木形子異報・2〉

木村弦三の記憶(2)

そういうことを思出さしてくれたのは木造町の松木たよ子氏の言葉であった。松木氏などももよく幼時この木おぼこを求めて帰ったひとりであったが、その遊びはたいてい着物を着せて背負っだことが記憶にあると話て居た。そして新田地方ではよく湯治帰りの土産に、女の子に与えたといふので忘れられぬものであったといふ。

〈木形子異報·2〉



木村弦三の報告(津軽木地業)

今秋、蒼山堂主人のご好意で「御国巡覧滑稽嘘月毛」を閲覧することが出来た。作者は倉光老人とのみあり他は不詳。勿論これは十返舎一九の膝栗毛を模倣ったものであるが、興味あったのは弥太と喜次が、破ヶ関から長峯村を経て大鰐に入る頃であった。

「長峯村の産神八幡を右手におがみ、程なく蔵館村にいたる、当所の温泉は諸病によし、・・中略・・当所大日如来の開帳にて参詣の貴賎老若村中に充満し、西側の湯小屋三味太鼓の賑わい・・中略・・・金頭餅の店先には買人先を争ふて止まず、木地挽の素見物、店先に闇々を寄せ・・中略・・・川並なる木地挽の前に立ちとまり、挽物細工を見物す・・ 〈木形子異報・3〉 昭和9年4月

木村弦三の報告(なめり棒)

今は死んだ大鰐の工人、澤田九郎兵衛老から、何時か賞ひ受けた明 治二十年の現物値段控帳が手許に存してゐる。今その十枚ばかりの半 紙を繰つてみると、記入された種類は凡そ百八十五点、そのうち子供に 関係あるものと云へば「小地操七厘、釜地操三つ入四銭、同五つ入 五銭、なめり棒三銭、手遊水桶七銭、子供ふくべ一銭五厘、手遊槌七 銭、呼子笛五銭、臼杵男四銭、同女五銭五厘」其他である。 右のうち地操はいふまでもなく独楽であるが、寸法によって種類が多く値 段も一様でない、また皿形、駒形等と区別されてゐる。なめり棒は例のお しゃぶりであり、これの大形はこけしとも云ふべきものであったらう、白木無 彩のまま大形のものだけへは、時々目鼻を入れた、これが大鰐こけしの最 も古い形態の一つである。〈木形子異報・6〉 昭和9年12月

木村弦三のという人物



明治37年生まれ。戸籍名は木村哲也。木村源蔵あるいは弦三の筆名を用い、こけし界では木村弦三として広く知られる。同郷の石坂洋次郎の影響を受け、マンドリン奏者となる。福士幸次郎に啓発され日本文化の基盤としての郷土文化を弘前から発信する活動に加わった。郷土音楽の研究に加えて、昭和3年からは土偶、民俗土俗人形、風、郷土玩具、こけし等の収集・研究にも力を注ぐようになった。温湯、大鰐の木地師を訪れて調査し、多くの工人にこけしの再興を要請したと言われる。

昭和10年3月〈陸奥乃小芥子〉発刊。これによって、 佐藤伊太郎、斎藤幸兵衛、山谷多兵衛、長谷川辰 雄、三上文蔵、川越謙作といった津軽の工人達は始 めて文献上でこけし界に紹介された。

- 昭和40年 青森県文化賞
- 昭和42年 青森県知事褒章
- 昭和43年 東北音楽賞
- 昭和53年 勲五等瑞宝章

http://kokeshiwiki.com/?p=7983

能代: 脇本三十郎の怪



本来のこけし作者とは思われない業高校で>木地を学ぶ。とても三十郎の詳しい経歴あり、能代へこけし手帖・78>



らってコレクション5寸2分 昭和11年木村弦三氏より古物恵与 〈こけしと作者〉のものも木村氏より入手



<うなるの友·貮編> (明治35年)24図

木村弦三は工人に見本を示して製作依頼することがあった?

西田峯吉の報告(1)

私の現地採訪ノートによると、温湯出身の島津彦作は彼が十歳前後の頃、すなわち約五十年以前の温湯土産を思い浮べ、杓子や、じょうば、こまなどと一緒に木人形があったといい、ただ、それを何といったか名称は記憶にないという。また大鰐の居付の古い木地屋である間宮明太郎は、やはり、子供の頃(およそ四十年以前)大鰐に木人形があったのを記憶しているといっている。

私のノートは、さらに彼らのいう木人形について記している。温湯のそれは六、七寸の造り付けで直胴式の胴であり、頭は墨で塗り、顔は粗末で瞳は入れなかった。胴模様は全然なく、ただ上下に墨で線を入れただけで染料は全く用いなかったという。大鰐のそれは造り付け、直胴で寸法は四、五寸くらいのものであった。頭は墨で塗るか、またはロクロで輪を入れ、目は瞳のない一筆描きであった。胴は模様なしで、線すらも入れないものがあり、もし線を入れる場合でも鉋で条を入れるか、もしくは墨か赤の細線を上下に入れただけのものであった。

〈こけし風土記〉

西田峯吉の報告(2)

島津と間宮の記憶をどれだけ信じてよいか今の場合、私にもよくわからない。あるいは同じような質問にしばしば接するので、無意識のうちにつつの答えを創作することもありうることではあるが、木村氏の発表もあることだから、今さら、そうした疑いは不必要であろう

〈こけし風土記〉

大沼岩蔵からの聞書

大鰐に行った時は手挽きロクロを使用していた。こけしはあったが、ロクロ模様だけあったので、自分が花模様を描くことを教えた。

〈鳴子・こけし・エ人〉

こけしの郷愁 第九冊

温湯木地業は宝暦年間に既にあったと云われ、嘉永三年津軽藩の「湊方出入物御役帳」には「人形一籠に付出入二文目」と記されていて、この人形は長おぼこをさすらしい。



佐藤伊太郎の長おぼこ

板祐生コレクション

伊太郎は明治2年生まれ。斎藤幸兵衛 (明治23年生まれ)、間宮明太郎(明 治28年生まれ)より一世代前の工人

描彩:斎藤幸兵衛

木村弦三コレクション





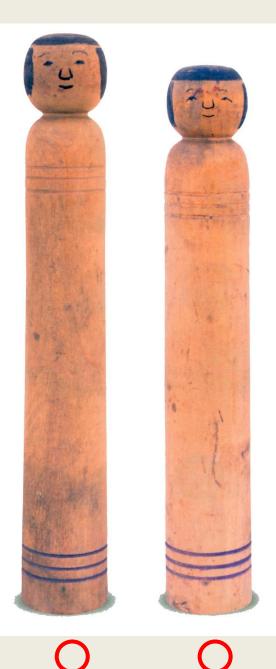


斎藤幸兵衛の長おぼこ



間宮明太郎の木おぼこ 木村弦三コレクション







間宮明太郎



斎藤幸兵衛

村井福太郎の木おぼこ木村弦三コレクション





昭和43年 嶋津木工所で木地を挽いていた村井福太郎

大鰐 大円寺 阿弥陀如来 平安末期から鎌倉初期の作



昭和43年 村井福太郎と大円寺



大鰐に来た鳴子工人

大鰐 大沼岩蔵

明治41年(このときは数日)

昭和5年~6年

秋山耕作 大正2年~12年(5年までは蔵館) 大沼甚五郎 大正2年 大沼熊治郎 大正4年

温湯・板留めから大鰐への移住

嶋津彦作·彦三郎 大正3.4年 佐々木金次郎、長谷川辰雄 大正10年 斎藤幸兵衛 昭和7年 1年後に弘前へ

鉄道の開通

明治27年12月1日:青森駅-弘前駅間開業 奥羽北線

明治28年10月21日:弘前駅-碇ケ関駅間が開業

奥羽南線 明治38年9月14日:湯沢駅-横手駅間が開業。

福島駅 - 青森駅間が全通。

大正6年 全線開通。 陸羽東線



鳴子の影響が加わった津軽の形態

頭を墨で塗りつぶす様式のみ津軽長おぼこの名残りか



佐々木金次郎(描彩:辰雄)

鳴子の影響が加わった津軽の形態



嶋津彦三郎

三上文蔵

鳴子の影響が加わった津軽の形態

頭を墨で塗りつぶす様式のみ津軽長おぼこの名残りか



嶋津彦三郎(調布市郷土博物館蔵·加藤文成旧蔵)

ジョウバツチ



嶋津彦三郎

閑話休題

浅虫の木地屋

伊藤松三郎から聞いた話

浅虫は、一方を海に面し、三方を山に囲まれているため、木地業 も盛んに行なわれた。最も古いこけし作者と伝えられるのは、温湯 の斎藤幸兵衛の祖父の姉に婿養子として入った浅虫出身の木 地師で、間もなく離縁になって浅虫に帰り、温湯で覚えたこけしを 作ったという。浅虫に帰った年代はおそらく明治初年で、大正年 間まで営業していた。大正三年浅虫に行った伊藤松三郎は「キ ヅスキヤマ(木地挽山)」と称する場所で、老人がジョウバツチ (温湯・大鰐地方特有の木地玩具)を挽いているのを目撃して いる。姓名は不明であるが、松三郎が浅虫にいる間に没し、未亡 人は青森市栄町の実家へ帰ったという。

盛秀太郎のこけし(1)

- 1. 大正3年春、温湯部落の薬師寺住職の夫人の弟で宮城県佐沼出身の佐々木芳男からこけしの製作を勧められたのを契機に色々工夫してこけしを作り始めた(大阪こけし教室の〈教室だより·第12号〉 丹羽義一氏が昭和37年8月4日に盛秀太郎を訪ね、秀太郎のノートを確認して記載した内容)。
- 2. 初めておぼこ(こけし)をつくってみたのは大正5年、22歳のときであって、当時宮城県佐沼中学(宮城県登米市迫町佐沼の宮城県立佐沼中学校、元の宮城第六中学校、現宮城県佐沼高等学校)生であった友人の佐々木某(現在は樺太に在住)にこけしを見せられ、かつ奨められるままに試作したのに始まるという(西田峯吉聞書:〈こけし風土記〉)
- 3. この人が初めて『こけし』という言葉を聞いたのが大正3年頃 『頭と胴だけの人形というので、最初に作ったのが、シルク・ ハットに燕尾服の紳士が巻煙草をくわえていたのだよ』と笑って・・・(露木昶聞書:〈こけし手帖·第13号〉)

盛秀太郎のこけし(2)

4. 大正の初めに仙台から来た友達がこけしを持って来て、わしに見せてくれるまで、こけしというものを見たことがなかった。このときが初めてだった。わしはこのとき、それにヒントを得て、津軽はリンゴの名産地だから、それにちなんで、頭にリンゴを載せた娘の木人形を作って売りだしてみた。ところが、これが案外各方面から好評を博した。これがキッカケとなって、その後われもわれもと、いろいろの木人形を作って売るようになった。おそらく、これが津軽地方にこけしらしい人形が作り出されるようになったそもそもの初めではなかったかと思う。

(土橋慶三: 〈こけしのふるさと〉)

5. 秀太郎さんのこけしは、7年前(大正14年頃と推定される)、 黒石の郷土研究家佐藤雨山という人にすすめられて挽いた のが始まりで、陸奥の郷土色を出すためにアイヌ模様を取入 れたのも佐藤氏の意匠に他ならぬ。

(橘文策: <こけしざんまい>)

盛秀太郎のこけしと鳴子の形 頭を墨で塗りつぶす様式のみ津軽長おぼこの名残りか



天江コレクション



(C) 調布市郷土博物館



岩蔵、昭二の小寸

頭を墨で塗りつぶす様式は津軽木おぼこからの逆輸入か? 岩蔵一族以外に黒頭を描く鳴子の作者はいない。 もし、逆輸入なら大鰐に先行する木おぼこは存在した。



岩蔵



今日の論点

- 木村弦三の言う「木おぼこ」「長おぼこ」 は本当にあったか?
- あるいは津軽系こけし自体が木村弦三の プロデュースにより生まれたものか?



木おぼこ、長おぼこは存在した

- 木村弦三の詳細かつ具体的な聞書き
- 西田峯吉の追証となる聞書き
- 長おぼこ:佐藤伊太郎の様式 木おぼこ:間宮明太郎の様式
- 岩蔵の黒頭は木おぼこからの逆輸入

木おぼこ、長おぼこはどう発生したか?

こけし発生の三条件

- ① 木地師が山から降りて温泉地に定住し、湯治客の需要 を直接感じるようになる。
- ②赤物が伝えられる。
- ③ 湯治習俗が一般農民に一種の再生儀礼として定着する

土湯、遠刈田、作並、鳴子はすべて三条件を満たす。

岩蔵が大鰐に行く前に、津軽に赤物が伝わったという記録はない。

木おぼこ、長おぼこは染料を使わず、墨だけだったとすれば赤物の伝承はなかったと考えた方がいい。

木おぼこ、長おぼこはこけしに進化する前の前駆体か?

木おぼこ、長おぼこ発生についての仮説

- こけしの前駆体となるものは日本国中にあった。
- 三条件によって、その前駆体は今日のこけしに まで進化をとげることが出来た。
- 木おぼこ、長おぼこはその前駆体が残ったもの



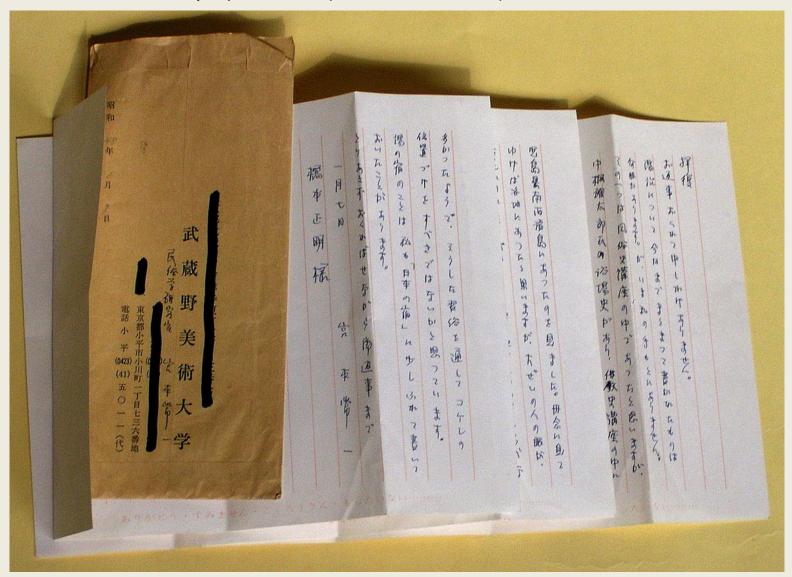
津軽以外の前駆体は??

津軽以外の前駆体(1)



京都で作られたという古いロクロ製木人形 江戸期の作 (箕輪新一蔵)

津軽以外の前駆体(2)



宮本常一さんの報告

宮本常一さんの報告

なおコケシは新しいことぱで、古くはキボコといっていたようです。コケシボウコともいったといいますが、コケシということばそのものは木屑のことであり、キボコの方が一般的だったようです。

そしてそれは東北だけのものではなかったようです。私の郷里山口県大島などにも幼少のころにはありました。し、またろくろは使わなかったけれど、形からいって同形のものが、鹿児島県南西諸島にあったのを見ました。丹念に見てゆけば各地にあったと思いますが、大ぜいの人の眼が、東北にのみそそがれていて、他の地方についてしらべなかったことから、東北のみの特異な現象のように思いこんだのではないかと思います。

奥井紀舟氏からの情報①

NPO法人周防大島郷土大学役員

キボオコについて

今から50年以上前のことですが、宮本常一氏と祖父が話しをしていた中に、ボオコについての会話があったのを覚えております。曾祖母に『ボオコて何?食べるもの?』と尋ねたら『女の子のもんよ、キボコとゆうんで、ひな祭りの服のない木の人形さん』と曾祖母は言いました。曾祖母の隠居部屋に何体かがあったのを覚えております。また、祖父の妹の家にもありました。

祖父との会話で記憶しているのが、炭焼きのことで、『この度で最後です。ありがとうございました。』と御礼としてキボオコ作り、持ってきました。実物を見ました。何体かありました。三体は曾祖母の隠居部屋にありましたが、一緒に火葬したと思います。周防大島にまだ木地師がいて、キボオコを作ったのは、事実です。

奥井紀舟氏からの情報②

NPO法人周防大島郷土大学役員

木地屋とサンカについて

キジヤのほかはハチミツミツカケ(サンカ、サンガ)も山の家で寝泊まりしていたことをはっきり記憶しています。

集落と少し離れた位置にある家で寝泊まりしていました。すると我が家では、『今、サンカのミツカケがきとる、木地屋がきとる』と言いました。何故、自分ところの家に知らん人が寝泊まりしているのか、子ども心で不思議に思っていました。

私の家に来て炭焼きをしていたのは、確かにキジヤ(親父の従兄弟に確認しました)です。炭焼きをやめて余所に行くので御礼にキボオコを作って竹の籠に入れて持ってきたことは、間違いないです。 轆轤で回して作ったキボオコと思うのです。

奥井紀舟氏からの情報③

NPO法人周防大島郷土大学役員

ロクロについて

祖父に、『ろくろって何?』と質問したところ、『石臼みたいのをまわす』という答えでした。

キジヤとサンカが仕事するときは山の家に泊まっていました。

キジヤやサンカは、集落の人達に素顔は見せませんでした。常に頬 被りをしていました。

山の家に布団、食器類が置いてあり、轆轤もありました。祖父と山の家に上がった時『あれが轆轤じゃ』と教えてくれました。

54年くらい前、キジヤが、ケヤキの盆を作ったらしく、それをキジヤの盆と言っていました。漆を塗るときかぶれるから触るなよと言っていました。盆や竹のこおりを山の家の外に並べていたことを覚えております。

奥井紀舟氏からの情報④

NPO法人周防大島郷土大学役員

ほ~こさんについて

宮本常一先生の本を読む会の会長さん(宮本常一氏の生家の近く)の奥様から指摘がありました。正しい呼び名は『ほ~こさんです。ボ~コ、キボオコは記憶違いですよ。』と。

はっきりしているのは、ほ~こさん人形を作っていた木地師樽屋 (木地師)が存在していたということです。

ほ~こさんの顔全体を記憶していれば良いのに、45年以上前です、ただ私の印象では、華やかな人形ではなかったです。眼はあけていない。ちょっと長いU鼻、小さな点のような唇、おかっぱのおさげ、耳はなかったか、胴体部分には、笹の葉のような絵か、輪がありました。ほ~こさんを座布団にくるんで、おんぶして、遊び唄を歌っていたというおばあさんがいました。

奥井紀舟(831.7.10生);山口県大島郡周防大島町地家室

這子・ほ~こ・奉公・は~こ・はこた



倉吉 はこた人形 は~こさん、 はあこさんと呼んだ



高松 奉公さん 痴娯の家

幼児の形代の役目を果 たすもので、幼児の身 近に置き、幼児にやっ てくる災いをそれに移 した。



這子 東京国立博物館

周防大島 ほ~こさん ワ

這子・おほこ・おぼこ・きぼこ



這子 東京国立博物館



木おぼこ



大竹地蔵尊



きぼこ

人形の世界

久松保夫が追求したかった世界



這子と天児



這子の世界



津軽の木おぼこ・長おぼこ は未だ「這子の世界」の人形 すなわち「こけしの前駆体」 だったのだろう。









這子と天児 東京国立博物館



天児



完